

## Contents

- ❖1970年代の卒業アルバムから見た私の大東文化大学
- ❖『大東文化大学百年史』中巻まもなく刊行
- ❖大川周明『亜細亜・欧羅巴・日本』と土屋久泰『哀靄三章』
- ❖百年史編纂の現場から
- ❖大東アーカイブス活動記録

### 「西台駅の開通」(1968年12月)

大東文化大学が池袋から板橋へ移転したのは1961年8月のことでした。高島平地建設が開始される前のことで、西台校地（現在の板橋キャンパス）周辺の徳丸ヶ原は元「緑化地域」指定の水田地帯でした。都営地下鉄6号線（現在の三田線）巢鴨-志村間が開通した1968年になっても周辺にはまだ田畑が多く、西台駅からは遮るものなく大学校舎がよく見えました。その後、1972年の高島平地地への入居開始や、1976年の高島平—西高島平開業による三田線全線開通などによって活気溢れる地域として発展したのでした。

Daito Archives  
Newsletter

大東文化歴史資料館  
ニュースレター  
エクス・オリエンテ

Vol.

37

*Ex Oriente*

# 1970年代の卒業アルバムから見た 私の大東文化大学



大東文化大学副学長

青木幹喜（経営学部経営学科教授）

私の研究室には、何冊かの卒業アルバムがある。数年に1回開く程度ではあるが、大事に保管してある。私は、大東文化大学へ勤務する前に、2つの大学に勤務していたが、2つの大学ともに、卒業式の時に卒業アルバムを贈ってもらっていた。2002年から大東文化大学に勤務するようになったが、卒業時に卒業アルバムを贈ってもらったことはなく、研究室には大東の卒業アルバムはない。

しかし、数年前に、板橋校舎のとある部屋で、かつて発刊されていた大東文化大学の卒業アルバムを目にした。卒業アルバムを見ると、これまでに活躍されてきた教職員の皆さんの姿を写真で見ることができた。また、当時のゼミの写真もあり、なつかしく卒業アルバムを見た。私が見た卒業アルバムは、なんと1970年代のものであり、私自身が大学生だった頃の卒業アルバムだった。

そのうちの1冊の卒業アルバムの中の数枚の写真が今でも私の記憶に残っている。その一つは、大学祭の写真で、当時の大学祭で行っていたコンサートの写真だった。帽子をかぶり、当時の流行の服装をしていた女性ボーカリストの写真が目にとまった。最初は気にもとめなかったが、待てよとよく見ると、当時デビューしたての荒井由実の写真であった。

大東文化大学の学園祭で荒井由実が、コンサートを行っていたことを知り、びっくりした。その後、ネットで調べると、確かに荒井由実が1975年（昭和50年）に、この大東文化大学の学園祭でコンサートを行っていたという記録が残っていた。荒井由実のデビューは、1972年なので、各大学の学園祭でコンサートを行ない、荒井由実を知ってもらおうと活動していた時期なんだと、当時の大東文化大学の卒業アルバムを見ながら思っていた。東京から離れた千葉で大学生活を送っていた私からすると、大学祭で荒井由実のコンサートがあるなど、夢のまた夢で、やはり大東文化大学は都会の大学なんだと痛感した。

1970年代の大東文化大学の卒業アルバムを見て驚いた二つ目は、私の大学院修士時代の指導教官であった都筑栄先

生が、ゼミ生とともに写っていた写真があったことである。都筑先生と初めて会ったのは、横浜の大学であった。先生の経歴など知る術もない時代で、まさか私の指導教官がこの大東文化大学の専任教員だったとは思もしなかった。

やや専門的になるが、都筑先生は、フランス経営学の研究者であった。アメリカが中心の経営学研究の中で、フランス経営学を専門にしていたのは、当時、都筑先生くらいであった。フランス経営学なんて関係ないと思われる方が数多くいるかもしれないが、そうでもない。現役の教員や職員は、耳にタコができるくらい聞かされているPDCAという発想は、このフランス経営学の研究から生まれている。

都筑先生は、このPDCAの発想の源流を作ったアンリー・ファヨール（Henri Fayol）の研究を日本で初めて紹介した研究者であった。アンリー・ファヨール（Henri Fayol）は、鉦山会社に勤務し、最終的には鉦山会社の社長になった人である。並の人と違うのは、自らがなった社長の仕事は何かを分析的に捉え、P（prévoir：予測する）、O（organiser：組織する）、C（commander：命令する）、C（coordonner：調整する）、C（contorôler：統制する）の5つの要素が、社長の仕事だと明らかにしたことである。その後、このPOCCCという5つの社長の仕事は、P（plan：計画する）、D（do：実行する）、S（see：統制する）とかP（plan：計画する）、D（do：実行する）、C（check：統制する）といったように簡略化され、今日に至っていく。

このPOCCCという社長の仕事を紹介した本が『産業並びに一般の管理』という本であり、出版は1916年で、なんと今から100年以上前に出版されていた。当然、『産業並びに一般の管理』という本は、最初、フランス語で書かれ、このフランス語で書かれた本を日本語訳したのが都筑先生であった。こんな先生も、大東文化大学にはいたのである。

1970年代の卒業アルバムの写真から、私の気になる大東文化大学の一面を述べてみた。

# 『大東文化大学百年史』中巻 まもなく刊行

百年史編纂委員会委員長

中村宗悦（歴史資料館館長・社会経済学科教授）

お待たせしておりました『大東文化大学百年史』全3巻の中巻がこの3月末に刊行されます。中巻は戦後の混乱期を経て、板橋キャンパスへの移転、東松山キャンパスの開校、そして、いわゆる「大学設置基準」の大綱化前の1980年代の終わり頃までが扱われます。中巻の目次は以下の通りです。

### 【中巻目次】

概観（中巻）

#### 第四章 戦後学制改革と新制大学の発足

第一節 青砥仮校舎への移転と戦後復興

第二節 新制大学の設置と池袋校舎への復帰

第三節 大東文化大学復興計画と後期池袋校舎での生活

#### 第五章 大東文化大学の振興と運営方針の策定

第一節 池袋校舎から板橋校舎への移転と創立四〇周年記念事業

第二節 新学部（文学部・経済学部）の設立と教育課程

第三節 東洋研究所・大学院文学研究科

第四節 附設校（高等学校・各種学校・幼稚園）の開設

#### 第六章 東松山校舎の開校と板橋校舎の整備

第一節 東松山校舎の建設

第二節 学部学科の増設

第三節 学生定員の増加

第四節 教育課程と大学院・研究所

第五節 創立五〇周年と板橋校舎の整備

#### 第七章 キャンパス再開発と新学部の設立

第一節 東松山校舎の再開発事業

第二節 新学部（国際関係学部）の設立

第三節 学生定員の増加と臨時定員増

第四節 教育課程と大学院・研究所の整備、国際交流の充実

第五節 創立六〇周年記念事業と学園全体の事業計画資料資料編

- ・VI 戦後学制改革と新制大学の発足
- ・VII 大東文化大学の振興と運営方針の策定
- ・VIII 東松山校舎の開校と板橋校舎の整備
- ・IX キャンパス再開発と新学部の設立

中巻で扱われる時期の本学は、戦後日本の歩みと軌を一にしつつ大きく発展していきました。進学率の上昇とともに学生数が飛躍的に増大するとともに、社会の多様なニーズに応えるため、新たな学部、学科、研究科が増設されました。1947年に新

制大学に生まれ変わった時点では文政学部たった1学部であった極小規模の大学が、文学部、経済学部、外国語学部、法学部、そして国際関係学部という5学部を擁する中堅私大へと発展していったのです。文科系を中心としてですが、「総合大学」と呼んでも良いような陣容を整えていった時期だとも言えるでしょう。中巻はその間の詳細な事情について未公開であった理事会資料ほか歴史資料館がその創設以来収集してきた関係資料をふんだんに用いて明らかにしています。こうした発展の過程において我々の先達が何を考えどのような判断を下していったのかについて読み取ってくだされば幸いに思います。

なお、中巻も上巻と同じく限定部数を希望者に配布する予定ですが、電子版（PDF）は大学サイト内「継往開来」（<https://www.daito.ac.jp/100th/publications/>）からPDFデータがダウンロード可能ですのでご利用ください。紙版の配布方法につきましては後日お知らせいたします。

さて、百年史編纂委員会では『大東文化大学百年史』下巻（2026年3月末刊行予定）に向けて鋭意準備を進めているところです。本ニューズレターの前号では下巻のおおまかな構想をお示ししましたが、その骨格に大きな変更はありません。また下巻では当該時期に学長という要職につかれ活躍された方々に聴き取り調査をおこない、その内容も下巻の叙述に活かしていくこととしました。実際のインタビューにつきましては、この3月末に刊行されます『大東文化大学史研究紀要』第9号にその前編が掲載されますのでご高覧賜りますようお願い申し上げます。

なお、下巻が扱う時期（1980年代以降から現在まで）に大学に在籍されていた同窓生の皆さまや教職員OBOGの皆さまからの情報や資料提供も引き続き大歓迎ですので、100周年記念事業推進室（4月から「渉外連携室」に名称変更）内大東文化歴史資料館事務担当までご一報いただけましたら幸いです（連絡先は下記の通り）。ただし、入稿〆切の都合上4月末までをお願いいたします。

最後に大東文化大学史研究紀要編集委員会では『大東文化大学史研究紀要』第10号掲載の論文等を募集しています。大学史に関するご研究の発表、資料のご紹介などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問などに関しましても大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

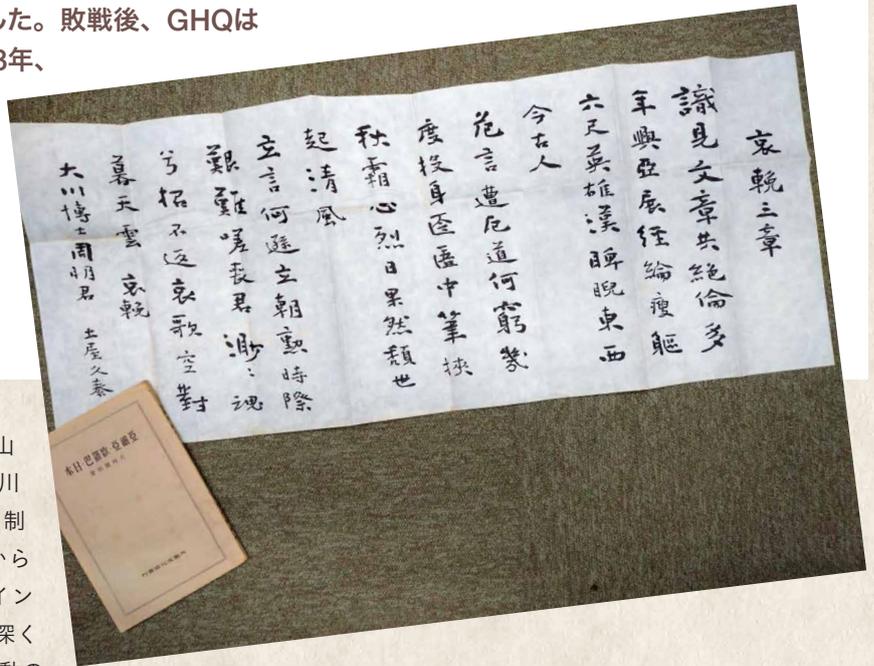
大東文化歴史資料館事務室

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

# 大川周明『亜細亜・欧羅巴・日本』と 土屋久泰『哀輓三章』

大川周明著『亜細亜・欧羅巴・日本』は、大東文化協会より1925（大正14）年10月に発行されました。敗戦後、GHQは大川の著書『大東亜秩序建設』（1943年、第一書房）を没収発禁としました。同書は三部構成となっており、『亜細亜・欧羅巴・日本』が含まれていました。一方、大東文化大学名誉学長である土屋久泰（竹雨）による「哀輓三章」は、大川周明の葬儀に際し霊前に捧げられた弔辞です。



大川周明は1886（明治19）年12月6日、山形県酒田市にあった西荒瀬村藤塚の医師・大川周賢の長男として生まれた。荘内中学から旧制五高、東京帝国大学へ進学、宗教への関心からインド哲学を専攻した。大学卒業後は亡命インド人の支援を行うなどインドの独立運動に深く関わるようになり、『印度に於ける國民的運動の現状及び其の由来』（1916年）を執筆した。



同書におけるインドに関する知識と考察力が初代満鉄総裁後藤新平（拓殖大学第三代校長）の目にとまり高い評価を受けたことで、1918（大正7）年より南満州鉄道に入社、さらに1920年より拓殖大学教授となり植民政策、植民史を担当した。満鉄では東亜経済調査局に入局、調査局編集課長、調査局調査課長を経て、1929（昭和4）年より財団法人東亜経済調査局理事長となった。1939年には法政大学教授として大陸部部長となったが、このとき大川は東亜経済調査局附属研究所を開設し自ら所長に就任しており、同研究所や拓大に所属する複数の関係者が法政大学大陸部開設および運営に携わった。

大川は日本主義、アジア主義を一貫して提唱していたこと

で知られ、敗戦後はGHQによってA級戦犯の容疑で起訴されたが、精神障害と診断され訴追免除となった。1958年12月24日、死去。大川の葬儀は青山斎場で行われ、葬儀委員長は徳川義親（尾張徳川家第19代当主）がつとめた。義親は大川と同生まれで東京帝大の同期でもあった。

大川周明が財団法人大東文化協会より『亜細亜・欧羅巴・日本』を刊行したのは、1925年のことであった。83ページほどの同書は次のような構成となっている。

## 目次

- 一 序論
- 二 亜細亜と希臘
- 三 カタルゴと羅馬
- 四 匈奴と欧羅巴
- 五 回教徒と欧羅巴
- 六 蒙古人と欧羅巴
- 七 欧羅巴の隆興
- 八 欧羅巴の世界制覇
- 九 復興亜細亜
- 十 欧羅巴・亜細亜・日本



同書序文において大川は、「容量には適はしからぬ大なる数箇の目的を以て書かれた。其の一は、戦争の世界史的意義を提

示して、当世に時めく巾幗の平和論者の一考を煩さんが為である。其の二は、言葉の真個の意味に於ける世界史とは、東西両用の対立・抗争・統一の歴史に外ならぬことを示さんが為である。其の三は、世界史を経緯し来れる如上両者の文化的特色を彷彿せしめんが為である。其の四は、全亜細亜主義に向つて論理的根拠を與へんが為である。而して其の五は、来るべき世界のために東西戦の竟に避け難き運命なることを明かにし、之に対する日本の莊嚴なる世界史的使命を省みんが為である」と述べている。

世界の国々の特性や歴史、宗教観など熟知していたとされる大川は、「いま、東洋と西洋とは、夫々の路を歩き盡した」「世界史は、両者が相結ばねばならぬことを明示して居る。さり乍ら此の結合は、恐らく平和の間に行はれることはあるまい」として日米戦の開始を予測し、同書の末尾において「来るべき日米戦に於ける日本の勝利によって、暗黒の世は去り、天つ日輝く世界が明け初めねばならぬ」と記した。その後、大川は1943年8月に「大東亜秩序の歴史的根拠」「大東亜圏の内容及び範囲」「亜細亜・欧羅巴・日本」の三部から構成された『大東亜秩序建設』（第一書房）を刊行したが、敗戦後GHQによって没収発禁となったことで知られている。

大川が大東文化協会や同学院において教壇に立ったり、あるいは講演を行ったりといった記録は管見の限り見当たらない。ではなぜ大東文化協会から『亜細亜・欧羅巴・日本』が発行されたのかというと、奥付に記された「発行者 土屋久泰」の存在があったのではないかと推察される。

土屋久泰（号を竹雨）は、1887（明治20）年4月10日、山形県鶴岡市に生まれた。1906年に庄内中学を卒業し、旧制二高、東京帝国大学へと進学した秀才であった。大川とは生年も近く庄内中学の同窓でもあり、高校は異なったが、ともに東京帝国大学へと進んだ地元の誉れ、郷土の偉人であった。土屋は1923（大正12）年



2月に大東文化協会が発足して以降、その活動に参画しており、敗戦後に新制大学へと移行する際には大学長となってその舵をとった。大川との交流の記録は残念ながらそれぞれの日記などにもほとんど書き残されていないが、大川周明の葬儀において霊前に捧げられた漢詩「哀輓三章」は古い友人を偲び、高い学識や優れた見識を持っていたことを讃えた、故人への思いに溢れたものであった。

「時際艱難嗟喪君」、君を失った哀しみに溜息が出てしまうと詠んだ「哀輓三章」は現在、大川の郷里である山形県酒田市日吉町1丁目・日枝神社に置かれた「大川周明博士顕彰碑」に刻まれている。

### 哀輓三章

識見文章共絶倫多  
年興亜展経綸瘦軀  
六尺英雄漢睥睨東西  
古今人  
危言遭厄道何窮幾  
度投身囹圄中筆挾  
秋霜心烈日果然頽世  
起清風  
立言何遜立朝勲時際  
艱難嗟喪君渺々魂  
兮招不返哀歌空对  
暮天雲 哀輓  
大川博士周明君 土屋久泰

顕彰碑の裏には「題額 酒井忠明 大川周明顕彰会 大川周明博士生誕百年祭実行委員会建之 昭和六十一年十月吉日」とあり、さらに顕彰碑の脇には読み下した文と、土屋の経歴について次のような文章が刻まれた石も添えられている。

### 哀輓三章

識見文章、共に絶倫  
多年興亜経綸を展ぶ  
瘦軀六尺 英雄漢  
睥睨す 東西古今の人

危言 厄に遭うも道何ぞ窮せん  
幾度か身を投ず 囹圄の中  
筆は秋霜を挟み 心は烈日  
果然頽世 清風を起す

立言何ぞ遜らん 立朝の勲  
時 艱難に際して嗟す  
君を喪うを  
渺々たる魂兮 招けとも返らず  
哀歌空しく対す 暮天の雲  
哀輓  
大川博士周明君 土屋久泰

昭和三十三年二月十五日、東京青山斎場に於て行われた葬儀の日、霊前に捧げられた弔辞。土屋竹雨久泰先生は、明治二十年鶴岡に生れ、庄内中学校・第二高等学校・東京帝国大学に学ぶ。漢詩は当代第一。書家として亦一家をなす。長年大東文化大学々長として東洋文化の振興に寄与す。昭和三十三年十一月、七十一歳にて逝去。

題額「大川周明博士顕彰碑」の文字は旧鶴岡藩17代当主の酒井忠明によるものであり、「哀輓三章」は土屋の揮毫がそのまま刻まれた。土屋は大川の死から11ヶ月後、後を追うように死去した。

# News

## 百年史編纂の現場から

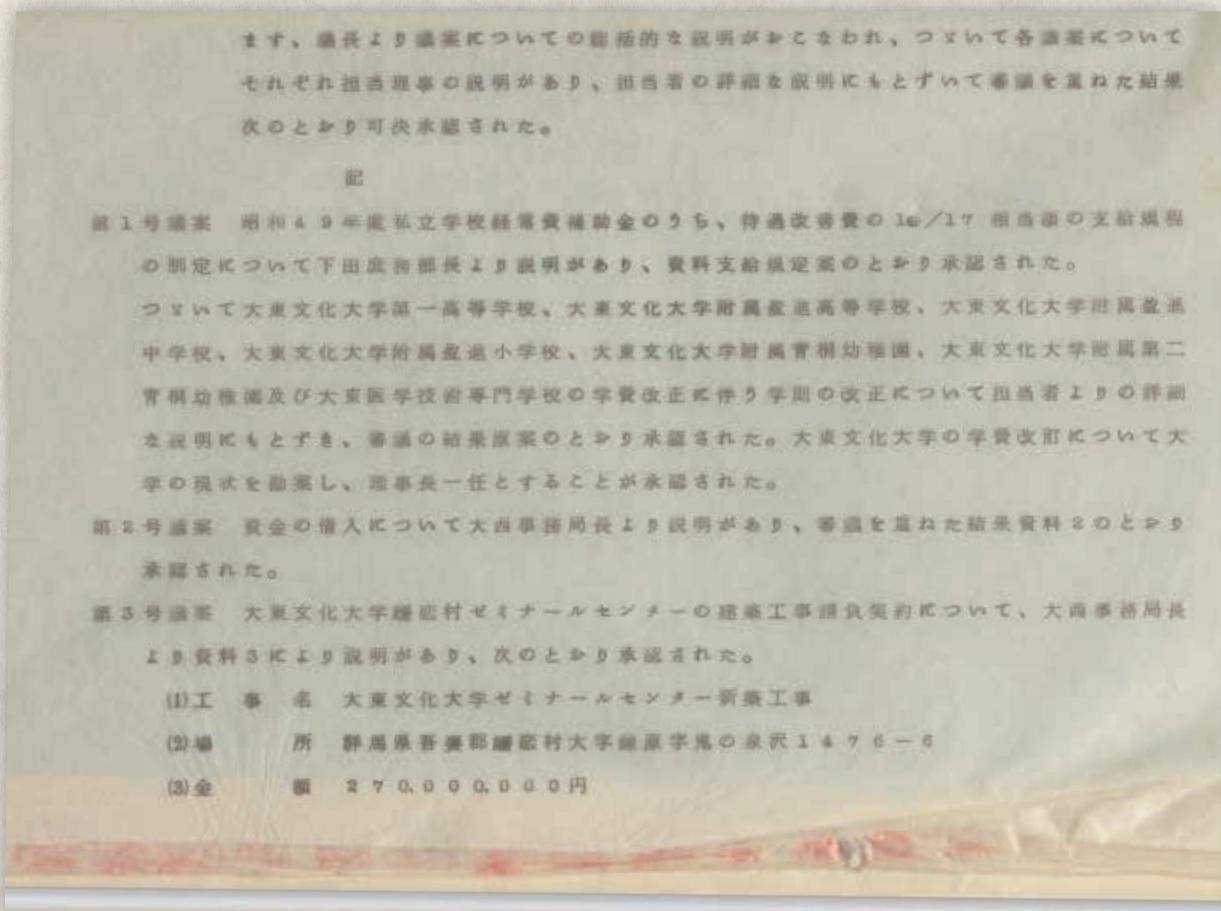
大東文化大学百年史編纂委員会副委員長

**谷本 宗生** (歴史資料館運営委員・専任研究員)

本号では、私の担当である『大東文化大学百年史』中巻のなかから、第6章の第5節にあたる創立五〇周年記念事業について、その要点を紹介する。1973（昭和48）年10月、本学創立五〇周年記念式典が挙行された。会場である板橋キャンパス大講堂には、奥野誠亮文部大臣をはじめ来賓、同窓会員、父兄会員、教職員、学生代表など総勢二千人が集い、記念式典がとりおこなわれた。

1973年6月、大東文化大学創立五〇周年記念募金委員会（会長：南條徳男名誉総長、委員長：金子昇理事長、副委員長：大島宇一同窓会長・鈴木則幸父兄会長ほか）は、学園の沿革や現況、五〇周年記念館建設計画などを記したパンフレットを作成し、本格的な募金活動（1973年3月～75年3

月）を開始した。本学が創立五〇周年記念事業として進めた板橋校舎内の五〇周年記念館は、鉄筋コンクリート造りで地下1階から地上6階建て、延べ床7440㎡が中央にそそりたつものであった（工費：5億5千万円、施工：飛鳥建設株式会社、1973年10月竣工）。創立五〇周年にともない、板橋校舎内に五〇周年記念館が建設され、東松山校舎の開発とともに板橋校舎の教育環境としての整備も、いっそう進められていくことになる。また71年1月から編集会議が開かれた記念史編纂委員会（委員長：影山誠一、副委員長：原田種成）は、73年9月に学園紛争（騒動）、新制大学昇格、板橋移転、東松山校舎建設等、いくつかの重大事件も内容的に網羅し、全1100頁以上にもおよぶ『大東文化大学五十年史』を編集



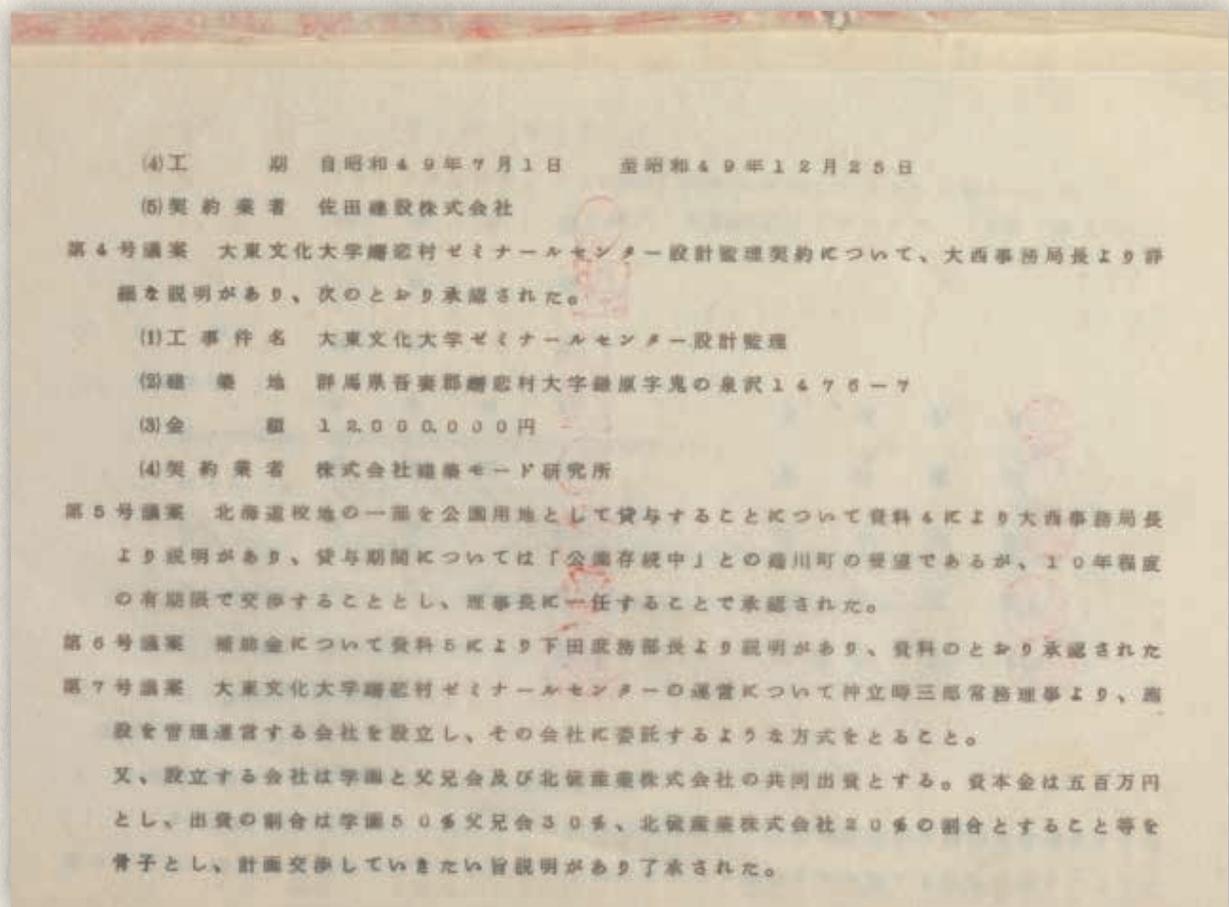
1974年11月25日理事会の議事抜粋

刊行している。

記念事業に必要な資金としての6億5千万円のうち、4億8200万円は自己資金（積立準備金）2億円と借入金（日本私学振興財団）2億8200万円であって、残る1億6800万円は本学の同窓会員やその他の篤志者、法人の寄附金によった。同窓会では、1972年の総会で記念館建設資金のための寄附応募額1億5千万円を全面的に支援協力すると可決しており、翌73年から同窓会員各位にあて、一口2千円で10口以上とし、払込み方法も一括または10回以下の分割払いとされ、募金協力のお願いがなされた。

父兄会（現：青桐会）でも、同窓会と同じく大学五〇周年事業へ協力する姿勢をみせ、父兄会独自の協力として、「学生

と教師との精神交流の場」や「父兄も活用できる場」の建設をはかる（建設費：2億5千万円）と、1971（昭和46）年の父兄会総会で決議し、75年5月、大学の厚生施設である孀恋ゼミナールセンターが群馬県吾妻郡孀恋村に竣工開設する（挿入画像：同施設運営は74年11月理事会で承認）。加えて、保護者らが東武文化大学を訪問した折りなどに、子弟や教職員らと面談をおこなって、飲食なども気軽にできる施設の建設を要望し、76年12月、保護者や学生、教職員らとのコミュニケーションの場として、東武東上線の東武練馬駅近く（板橋区徳丸2丁目）に大東文化会館が竣工開設されたのであった。



# 大東アーカイブス活動記録

2024年4月～9月

## 『大東文化大学史研究紀要』 第10号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』第10号に掲載する原稿を募集します。投稿締切りは2025年12月中旬を予定しております。投稿を希望される方は、2025年10月末日までにこちらのメールアドレスへお知らせください。ご質問等も随時受け付けております。  
**エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：**  
[archives@ic.daito.ac.jp](mailto:archives@ic.daito.ac.jp)  
「投稿規程」詳細については、百年史編集サイト「継往開来」(<https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/>)でも公開しておりますので、ご確認くださいませようお願い申し上げます。積極的なご投稿をお待ちしております。



## Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究結果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発刊（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。

4.3	事務打ち合わせ 資料デジタル化にかかわる業務
4.11	資料デジタル化にかかわる業務 WG会議
4.17	東松山図書館より所蔵資料移管
4.22	資料デジタル化にかかわる業務
4.23	地域連携センターより所蔵資料移管
5.13	資料デジタル化にかかわる業務 『大東文化大学百年史 中巻』打ち合わせ（定例会）
5.17	資料デジタル化にかかわる業務
5.20	同窓生来校対応
5.29	資料デジタル化にかかわる業務
5.30	展示会について（学外団体打ち合わせ） 学内所蔵資料移管（映像資料）
6.4	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・部会総会参加（於：中央大学）
6.13	『大東文化大学百年史 中巻』打ち合わせ（定例会） WG会議
6.28	東松山図書館より所蔵資料移管
7.16	総合企画課所蔵資料確認（年史編集にかかわる業務）
7.19	百年史編集委員会（第一回） 歴史資料館運営委員会（第一回） WG会議
7.23	全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於：明治大学）
7.31	ニューズレター「Ex Oriente」vol.36発行 『大東文化大学百年史 中巻』草稿提出
9.2	『大東文化大学百年史 中巻』打ち合わせ（定例会）
9.26	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会

## 資料寄贈ご協力をお願い

大東アーカイブスでは、本学関係資料のご寄贈をお願いしております。  
学園沿革史に関わる資料がございましたら  
大東文化歴史資料館事務室（大東文化大学総務課内）までご連絡いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。  
●大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室）  
電話:03-5399-7403  
E-mail:archives@ic.daito.ac.jp

## Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.37

発行:2025年2月28日  
編集発行:大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)  
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階  
TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647  
E-mail : archives@ic.daito.ac.jp:  
URL : <https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>